

「桐の木クリニックと関連施設群」見学会を実施して

医療法人唯愛会

半田文穂

平成 27 年 10 月 11 日(日)に開催された「第 1 回施設見学会」には、北は北海道から南は九州まで 7 施設、11 名の医師やコメディカルが参加されました。この度の皆様方のご参集に深く感謝いたします。もう少し準備しておけばと言う反省もありましたが、今後に生かして行ければと思っています。

「自由こそ治療だ」を翻訳して 30 年、診療所を開院して 20 年。治療とは存在そのものとの関わりであることと心して今日まで歩んできました。人口 6 万ほどの農村小都市に診療所を基点として、精神科病院を廃止したイタリア的地域精神医療の日本版を目指してきました。

見学会ではその実践の成果をご覧いただきました。非常にタイトなスケジュールでしたが、発達障害の利用者が大半を占める就労支援施設リベルタ高崎から始まり、移動途中マイクロバスでの説明を交え、グループホーム、デイケアそしてクリニックのホールでの昼食と講演をはさんで、最後は就労支援施設「リベルタ安中」のカフェテリアでの白熱した質疑応答で終わりました。講演の中では法人内各部署、施設について、所属若手スタッフによりプロジェクターを用いて説明させていただきましたが、参加者の方々から法人スタッフが育っているとの過分なるお褒めの言葉をいただき、感激した次第です。

見学会終了後、当会の定例の全体集会で今回の見学会について振り返りをしましたが、内情は参加者の方々の所と同様、人材育成はいまだ十分とは言えず、問題意識のズレや世代間のギャップをひしひしと感じております。とは言え、次の世代には何が何でも頑張ってもらわなければなりませんので、スタッフ一人ひとりが自ら日々問題意識を持つよう働きかけているところです。

最後に皆様方と私たちの実践がさらに点から線そして面へと進化、発展することを期待して、結びの言葉とさせていただきます。

尚、当法人の実践の成果に関しましては、日本精神障害者リハビリテーション学会の第 7 回ベストプラクティス奨励賞をいただきましたものをまとめた「地域精神医療と保健福祉の実践を目指して 20 年」をホームページ「[http : www.kirinoki-clinc.com](http://www.kirinoki-clinc.com)」に掲載してございます。ご参照いただければ幸いです。

群馬県・桐の木クリニックと社会資源の見学

大分県 寺町クリニック 太田喜久子

多機能型精神科診療所から第1回施設見学会のご案内が来て、即座に参加を決めたのは3つの理由からです。一つは半田院長は「自由こそ治療だ」の訳者で、私はこの本を数年前にイタリアトリエステの研修に行ったときに参考にしていたことです。また、ダイハツが群馬県から大分県中津市へ移転し、家族や若者も転居したため中津市の人口が増え出産数も増加し、外来患者には群馬県から来た人が受診されていたこともあり、高崎には一度行ってみたいと思っていた。さらに第3の理由があります。私が学生当時、名古屋市大学病院精神科教室に木村敏教授の精神病理学を学ぶために全国から極めて優秀な医師が集まり、次々とドイツ留学をされていました。半田先生はその中の一人であり、私は同門生でしたが勉強からは外れた集団にいました。「百聞は一見にしかず」と言われるように、まずは見ることで半田先生が地域に築かれた地域精神医療と保健福祉の実践を知ることができると思いました。

東京駅から新幹線で1時間、高崎駅に着き、ここからは半田先生の弟さんで、管理部長である半田卓穂氏が道先案内をされました。

就労支援施設「リベルタ高崎」は巨大な駅構内のJR高架下にある就労施設で、発達障害の人に対して配慮された場面を多く見ることができます。考えもつかない場所に展開されている就労支援場所の空間に驚きました。駅を出て田んぼの中を走る途中にグループホームが点在する。いろいろなタイプの借り上げの住居があり、それぞれのグループホームの名前は英語、日本語、イタリア語、フランス語、アラビア語で表わされています。「幸せ」という訳語を聞いてなるほどと納得しました。

約10分で到着したのは、住宅地の中に立つクリニック。外観は落ち着いたグリーンが基調ですが、中に入ると20年前に造られたとは思えない空間で、吹き抜けの天井は凝りに凝った梁がとても斬新です。クリニック内には心理の方が面接する部屋が9室あり、いつも稼働しています。外来棟と心理の部屋をつなぐ和式の庭園が奥ゆかしい雰囲気。デイケア棟はこじんまりとしていました。就労支援施設が広がる中でデイケアは次第に小規模化したとのこと。ここで釜飯の昼食をいただきながら、職員さんから活動の講義を受けました。

そして1時間半の講義後は就労支援施設「リベルタ安中」へと移動。JR安中駅前にイタリア風のピザレストラン、コンピュータ講義室、相談事業所、地域生活支援センターがあり、駅構内をSL列車が走るのを窓越しに見ることができます。さらに駅の南側には、まるで映画のシーンのようなパイプが外側をくねくねと走る工場が見えます。これは東邦亜鉛製錬所で、ロケなどに利用される光景です。明るいカフェ・リベルタでお茶をいただきながら、質疑応答が行われました。私は半田先生が活動をいつまで続けるかに関心があり、お聞きしたところ「生きている限りは止まらない活動である」とのご返答でした。

最後の霧積温泉は都合がつかず不参加でした。しかし、群馬出身の外来患者さんから「秘境にあり行く価値のある温泉」と聞いていたので、またいつか行きたいと思いながら高崎駅を後にしました。

半田先生は地域精神科医療に不登校の問題にも積極的に取り組み、保健福祉活動は講演会やコンサート、民生委員さんへの指導など、地域に深く根差した活動が展開されていました。発達障害へのきめ細かい就労訓練場面での工夫は、帰ってからすぐに取り入れられた収穫です。遠く、高い存在であった半田先生のフットワークの軽さやその気さくな一面もみることができました。「精神病理をされた先生は臨床ができない」という昔吹き込まれた先入観を一掃し、地域で先駆的な活動をされ、地域精神保健センター構想の実際に触れることができましたことに感謝。今後も現地視察が継続して行われることを期待しています。